

## 旅立ちに備えて

向かいの主なき庭の桜も葉桜に移ろうとしている。長年独り居すまひの老女がここを去つてマンションに転居して数月過ぎたが、まだ人気はない。

別府では珍しく粉雪がちらつく日だった。老女は防寒姿で終日芝生の手入れに余念なく、声をかけるのものはばかられるほどだった。しかし、それから数日後、突然転居のごあいさつ。翌日去つていった。あまりの手際よさに覚悟のほどがうかがえる。去る間際まで庭の手入れをしていたのである。「今日は汝を眺むる終わり日なり……」。少女時代の愛唱歌も胸の中で繰り返されていたらう。一期一会の諦念ていねんは人間に対してだけでなく、天地自然に対してこそ深く存在する。

この家は高名だった父が遺のこしたもの。あまりの手広に困惑しての転居であらう。独居老人が晩年を生きる選択の一つである。たしかに高層こじんまりとした便利っぽい快適さである。しかし、急変したこの合理性がかえつて老いを苦しめることもあらう。

ある老女はそうした快適な新生活を誇っていたが、突然電話をかけまくり、大声をあげ続け、驚いた子らに引きとられた。土を離れ、人声届かない沈黙の空間、見えるのは四角い空では無理もない。

妻なき後の独り暮らしをわが友は般若心経を大声で唱えている。一日一度はスパーにも。学長だった彼にもう虚飾はない。ひとは一生が勉強。老いての学習こそが本当の勉強。ひとそれぞれが身軽く旅立つための学習を苦心している。

(一九九五年四月十五日)